

SGH企画：第3回さくら塾&東山動物園フィールドワーク

第3回さくら塾 「進化の観点から、家族、子育て、教育、福祉を考える」

日 時：平成27年7月14日(火) 13:30~15:00

場 所：関高校北舎別館2F

フィールドワーク 「ニシローランドゴリラの家族の行動観察」

日 時：平成27年8月14日(金) 12:00~15:30

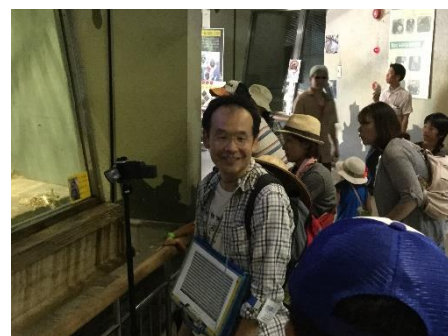
場 所：東山動物園

講師・指導者 竹之下祐二先生(中部学院大学教育学部准教授)

専 門：霊長類学、人類学

専門家のレクチャーを受け、ゴリラの観察を通じたアクティブラーニングにチャレンジしました！

- 講師は中部学院大学の竹之下祐二准教授(右写真)。
- 専門分野は、アフリカの大型類人猿(チンパンジー・ボノボ・ゴリラ)の生態や社会の研究。アフリカのガボンでのフィールドワークや類人猿の保護活動などに取り組んでいらっしゃいます。
- さくら塾の講演の内容は、ゴリラやチンパンジーの話からヒトの子育てや家族関係にまで及びました。
- 今回のさくら塾は、礼文島や東山動物園でのフィールドワークの事前学習会を兼ねています。



ゴリラの行動観察



ゴリラの家族の様子



屋外でゴリラを観察

- 東山動物園には「イケメンゴリラ」として有名なシャバーニとその家族が暮らしています。妻ふたり(ネネ、アイ)、子供ふたり(キヨマサ、アニー)の5人家族の行動を生徒5名で追いかけてきました。
- ゴリラの行動観察を繰り返すうちに、つぎつぎ疑問や課題が浮かび上がります。竹之下先生は生徒たちの自主性を重んじ、具体的な指示を出されません。生徒たちは、自身の力で考え、話し合いをしたうえで、先生とも話し合いました(右写真)。
- 主体的に問題を発見し、グループワークやディスカッションを重ね、課題解決をめざす。SGHで学んだアクティブラーニングを、フィールドワークを通じて実践しました。



＜さくら塾・レクチャーの感想＞

- 類人猿と比較の形で話されたヒトについての話題に大変ひかれました。ヒトの母親と子どもの関係。他の動物との違い。親と乳母。最も驚いたのが、いつから子育ては母親が主流になったのかということ。「ヒトは所詮知らない人についていってしまう生き物で、他人への依存で成り立っている」という言葉も衝撃でした。それでこそヒらしさが生まれるという言葉も同様です。竹ノ下先生は様々な動物を長年観察することで、やがて自らの本質が見えてこられたのだと思いました。
- ゴリラがヒト科だという事実に驚嘆し、ゴリラについて少し興味を抱いていたのですが、今回野生や動物園でのゴリラの映像を拝見してヒト科なのもうなずけるなと納得しました。生物学的な理由もたくさんあるのですが、知識皆無な私の視点では、ゴリラたちの行動がとても自分たちと似通っているように感じました。特に東山動物園での布切れで赤ちゃんの気を引こうとするお姉ちゃんと、それを妨げたいお母さんの光景が微笑ましく、それと同時に私も親戚の赤ちゃんに似たようなことをしたなと既視感のようなものを覚えました。
- 私にも、「子供の面倒を見てくれるのは母親」という固定概念があります。だけど、本来は子どもが育つために必要な行為を、親だけではなく複数の他人、そして自分自身が分業しているということがわかりました。それに、自立したゴリラは自給自足の生活をしているけれど、人は人から助けてもらいながら生きているという違いがあることに気づかされました。「自己責任」という言葉は良く聞きますが、動物と同じ生活を目指しているかのような言葉であることに驚きました。
- 今日の竹ノ下先生の講義を聞いて、「一人前になる」と言うこと考え方が大きく変わりました。「人に上手く助けてもらえることが一人前」と言うことにとっても共感できました。今までの考え方の「一人前」では、サルに退化してしまうと言う事実に驚きました。自分は今までサルを目標にしていたということですね。もっと早く知りたいことでした。次にゴリラの知性に驚きました。スリングを味わって楽しんだり、自分の子どもをたぶらかす布切れを回収したりと、とても知性が高いと驚きました。この話から、礼文島では自分の仕事をきちんとこなして、苦手なところを上手くカバーしてもらえるように頑張りたいと思いました。
- 私は、松沢哲郎先生の『想像する力』を読んだ上で講演会に参加しました。やはり同じヒト科であり、チンパンジーとゴリラには似ている点があると思いました。しかし、育児において両者はヒトとは大きく異なると思いました。今回一番納得した点は、母と子どもの両者が生き延びるために、ヒトは知らない人にもついていく、ということです。そのような、いわゆる共同育児が、生物学上ヒトが生きていく上で必要だと分かりました。
- 僕は今回の講演で、人間と同じヒト科に分類されるゴリラから、僕たちが周りとのどのような関係で育ってきたか、ということについて学びました。この講演の初めに、先生が実際にとったゴリラの動画を見ました。そこでまず、現地の人とゴリラのちょっとした意思の疎通ができていることや、ゴリラでも意思を体で表現することがあるということに驚きました。しかし、それは普通なこと、飼い猫でも尻尾で気持ちを表すようにゴリラでも当たり前に行うことなんだと思いました。
- 僕は母から生まれ、母から母乳をもらい育ちました。今ではそれが普通になっています。「育てるけれど母乳はあげない」というスタイルに違和感を感じ、戦前と戦後で考え方や価値観の違いを感じました。そして、先生が紹介された本もぜひ読んでみたいと思います。最後に、僕がこの講演で一番印象に残った言葉は、「自己責任が一番非人間的な言葉」ということです。これからは、このような言葉や、他にもいろいろなことを噛み締めながら活動していきたいです。

<東山動物園フィールドワークの感想>

■ 動物園自体が十年以上ぶりだったので、ただゴリラを見るという作業を長時間行うことは不安でしたが、**最終的には個体識別まで完全にできるようになり、ゴリラ一人ひとりをじっくり観察することで家族の関係まで少し把握できたのでよかったです。**「見る」と「観察する」の差で得られるものが大きく違うことを実感しました。今後も意識して観察したいです。

■ 今回の観察で最も興味深かったのは、アニーとその他の関係です。最後の30分間、アニーをずっと追いかけてきましたが、その間アニーは自分から誰かに近づくことを一切せず、シャバーニの近くにいるときもキヨマサとじゃれ合うときも彼女は全て受け身の態度でした。

そこで、

- ① シャバーニはどのようにしてアニーを気にかけるのか。育児なのか？
- ② アニーはなぜ自分から関わろうとしないのか。
- ③ ネネとアイはアニーをどう認識しているのか。
- ④ 母と姉に対しキヨマサはなぜアニーと関わろうとするのか。

というアニーと他の関係に関わる4つのことを考えながら次回の観察に臨みたいですが、たった数時間の観察でしたがゴリラの家族関係と人間のそれは非常に近いものがあると強く感じました。この4つの疑問も最終的には人間の社会や心理に繋がると思います。「なぜ」という疑問の答えは、**結局は私の想像になってしまうかもしれませんが、今後そこに繋がる根拠や観察方法を工夫しながら集めていきたいです。**

■ 僕はゴリラの行動観察を通して、フィールドワークの方法を学びました。**実際にやってみると、ゴリラたちは移動したり何か行動を起こすことが思ったより多かったので、見失ったりして大変でした。**しかし、一個体だけを見るなどすると、いつもと違う見方ができるということも学びました。今回、とても楽しく学ぶことができ充実した時間を過ごすことができました。この研究をSGHとして協力してやっていきたいです。

■ 本格的な観察してみることで、ふだん動物園で見ないような発見をすることができました。**全てを観察しデータをだすのは無理があるので、本当に必要なものを見極め、観察する対象を切り捨てていく必要があると実感しました。**そのため、データの取り方も、グループで考える必要があり、自分たちで方法を考えられたのでよかったです。